

福島県史料情報

第43号 平成27年(2015)10月



『安政見聞誌』下巻(佐藤健一家文書125)

安政江戸大地震と『安政見聞誌』

江戸時代末期の安政年間(一八五四〜一八六〇)、日本列島は安政地震といわれる三回の大きな地震に襲われた。それは、嘉永七年(一八五四)十一月四日に遠州灘沖で発生した安政東海地震(マグニチュード八・四)、その翌日の五日に南海道沖で起きた安政南海地震(マグニチュード八・四)、安政二年(一八五五)十月二日に江戸で発生した安政江戸大地震(約マグニチュード七・二)である。

安政江戸大地震は、十月二日夜四ツ時(午後九時二十分頃)過ぎに江戸湾北部の荒川河口付近を震源として起きた直下型の地震である。この地震による建物の被害は、江戸城はもとより各大名の江戸藩邸や旗本の屋敷にも及んだが、特に地盤の脆弱な下町低地での被害が甚大であった。福島ゆかりの大名の江戸上屋敷や下屋敷の多くで、住居・土蔵・長屋などが倒潰したり、土塀が倒れ、多数の死傷者を出した。また、地方からの出稼ぎや奉公人からも多くの犠牲者が生じ、夜間に発生した直下型地震であったことも人的被害を拡大させた要因であった。

『安政見聞誌』は、安政三年三月に三巻三冊で出版され、その内容は安政江戸大地震に関する災害情報誌で、作者は仮名垣魯文といわれている。挿絵は歌川国芳・歌川芳綱・豊原国周などの浮世絵師によって描かれているが、その多くは芳綱の手になるものである。芳綱は江戸時代後期の浮世絵師で、姓は田辺、通称は清太郎、一登斎・一燈斎・一度斎などと号した。また、芳綱は国芳の門人であり、武者絵・風刺画・風俗画を得意としたという。

上の図では、地震のため江戸城半蔵門の石垣や土塀が完全に崩れ落ち、老松も根本から倒れ、民衆がこの世のこととは思えない惨状を目の当たりにし、ひどく驚いている様子が描かれている。(渡邊智裕)

霊山道路の発掘調査と近世文書

福島県歴史資料館が開催した平成二十一年度の古文書講座では、霊山の麓である旧伊達郡大石村(伊達市

霊山町大石)のうち下大石村庄屋を務めた日下家に伝わった文書資料(日下金三郎家文書)から、近世の製鉄に関わる資料を取り上げて、古文書の解説を行った。

取り上げた資料は、寛永二十年(一六四三)霜月七日付国分久胤等連署製鉄掟書(日下金三郎家文書三七八号)、承応三年(一六五四)二月十五日付森善衛等連署鉄売買金皆済状(日下金三郎家文書三七九号)、明暦二年(一六五六)正月十二日桜井市兵衛等連署鉄売買金皆済状(日下金三郎家文書三八〇号)、万治三年(一六六〇)九月十七日付高橋長右衛門請取状(日下金三郎家文書三八



万治3年9月17日付高橋長右衛門請取状(日下金三郎家文書381号)

一号)等で、これにより米沢藩上杉氏領内大石村における製鉄を行う上での付加税の免除、鉄の売買や納税の様子が知られ、当地区においては製鉄が重要な生業の一つであったことを知ることができる。

ところで、当財団の遺跡調査課では平成二十五年年度から霊山道路区間の発掘調査を実施しており、大石地区の南隣で同藩内である石田地区に位置する行合道B遺跡において、十六世紀後半から十七世紀前半に比定される木炭窯が構築途中のものを含めて七基検出された(一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告2)。同年には相馬藩領である玉野地区の姥ヶ岩遺跡からも同時期の木炭釜が三基検出され、また、平成二十六年年度にはやはり玉野地区の向山遺跡から十七世紀前半頃と考えられる製鉄炉も確認されている。

これらのことは阿武隈高地における近世製鉄の実態の一端が姿を見せ始めていくように思われ、文書資料と合わせた研究が期待される。

なお、当時の鉄は留物として他領からの流入や他領への流出は厳しく規制されていることから、そのことにより相馬藩と米沢藩の製鉄技術の相違があるのかどうかについては気になるところであり、検出された遺構の比較研究が必要になると思われる。(安田稔)

江戸後期の湯野温泉

伊達郡湯野村(福島市)近辺は、摺上川沿いに温泉が湧き、対岸の飯坂温泉と共に「湯野温泉」の名が知られていた。同温泉の狐湯・切湯・下の湯は、江戸前期から湧出していたとされ、元禄の村絵図や「東講商人鑑」にもみられる。江戸後期には、賑わいと共に諸問題も起こった。

天保三年(一八三二)「乍恐以歎書奉願上候」(旧湯野村文書(その一)(三七六))は、湯野・茶屋渡世者一〇名が、下女召抱えを願い出た史料である。その理由を「湯治人大勢入込候節者、手人斗リニ而者手廻行届兼候事共有之」と述べており、温泉地の盛況と労働力不足を背景に、女中の活用を望む声が強まっていることを示している。同時期には、不審者を止宿させた一件の天保二年「差出申一札之事」(同文書三七五)や、博奕宿に関する慶応三年(一八六七)「乍恐以書付奉歎願上候」(同文書一六〇)などの史料も残されており、往来が盛んになっていく状況と裏腹に弊害も生じ始めている。

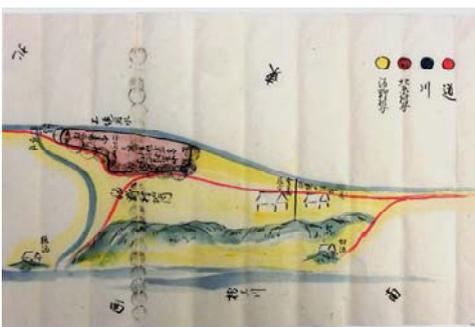
また、弘化四年(一八四七)には、隣村の北原村平三郎所持、はね渡堂(現穴原温泉)湧出の温泉入湯者増加に伴い、湯野・北原・四箇三ヶ村の間で湯宿渡世に関する「儀定一札」

(同文書三五七)が交わされた。規約では、平三郎の湯宿を認め、徴収した湯銭から年間銀三匁を新狐明神修覆料として備えることを定めた。

その上で、「同稼之もの相増候共、差構無之積」と補足し、新規の湯宿渡世と温泉場の発展を、周辺の村々が受け入れる立場を示している。

さらに、慶応年間には、湯野村と北原村との間で、新たな温泉湧出を契機とした土地争いが起こる。一時は、幕府評定所に裁定を仰いだ一件は、湯野村の主張・温泉管理を認める和解文「奉差上済口證文之事」(同文書一四二)と和解絵図「北原湯野両村地境絵図」(同文書一四三)をもって内済となっている。

江戸後期の湯野温泉は、入湯者の増加と新規温泉の湧出という光と、さまざまな諸問題の影を含んだ殷賑の温泉地であった。(小野孝太郎)



慶応4年2月〔北原湯野両村地境絵図〕部分(旧湯野村文書(その1)143)

黄色:湯野村分 茶色:北原村分 下部に摺上川

「刈田郡湯原村ノ内引渡書」と二〇〇年に亘る隣村間軋轢

国道三九九号線(いわき市―山形県南陽市)を山形方面へ向うと、茂庭湖を過ぎて宮城県に入り、約5km通過すると再び福島県を通り、山形県へ入る。途中の宮城県域には、ふくしまと深い関わりを持つ、七ヶ宿町の稲子地区の集落がみられる。

江戸時代、稲子地区は、仙台藩領の刈田郡湯原村に属していた。寛文七年(一六六七)には、湯原村と幕領伊達郡茂庭村との間で稲子山(五郎山)の帰属、境争論が起こり、稲子地区も論所となる。決着には二年以上を要し、幕府評定所の裁定で、湯原村の勝訴となり、稲子地区は湯原村に帰属することが確定した。

時が経ち、明治一(一八七八)年四月、湯原村稲子地区と茂庭村との間で再び摩擦が生じる。発端は、不明瞭であった刈田・伊達兩郡境に關し、太政官布告に従い稲子地区の福島県への引き渡しが決したことによる。稲子地区は反発するも、手続は進められ、その過程の事務文書が「刈田郡湯原村ノ内引渡書」(明治・大正期の福島県庁文書一二八六号)に編綴されている。簿冊は、庶務課架蔵で、明治一年八月に宮城・福島兩県の間で交わされた照会・

報告・演説書などを含む。中には、福島県から内務卿伊藤博文宛「土地人民受取済御届」や、福島県が引き継いだ戸籍帳・地籍帳などの一覽「事務引渡帳簿目録」、収穫等級反当表・利子表などを引き継いだ「演説書」があり、県を跨いだ土地引き渡し実務を追うことができる。

そして、宮城県が記した「磐城國刈田郡湯原村ノ内分裂事務引渡演説書」には、引き渡される住民の思いが記されている。寛文年中の山論に触れた上で、「爾来ハ仇讐ノ思ヒヲ成セル趣ニテ、隣村ト雖モ互ニ縁組等モ不致」と二〇〇年に亘る軋轢を述べている。また、宮城県の説論に對しても「貴縣へ合併候儀ハ、素ヨリ不得止ナレトモ、前述ノ通茂庭へ合併ヲ嫌ヒ候ヨリ外他事無之」と、福島県への引き渡しをやむを得ないとしながらも、茂庭村への編入を断固拒否している。

稲子地区は、伊達郡湯原村として福島県に編入されるも、住民からの上申もあり、翌年には宮城県所管となった。(小野孝太郎)



「磐城國刈田郡湯原村ノ内分裂事務引渡演説書」

「海川漁図説付略図類集」にみる明治期浜通りの漁業

これまで福島県の漁業(水産)史研究では注目されてこなかった「海川漁図説付略図類集」の概要とその成立事情について述べてみたい。

「海川漁図説付略図類集」は、明治十三年(一八八〇)三月に福島県勸業課の編で福島県から刊行された『福島県勸業課第二回年報 明治十二年』(明治・大正期の福島県庁文書二五二七号)に収録されている。これは「海川漁図説」とその付録である「略図類集」からなっており、両者は第二回年報のうち三二%の分量を占め、当時の福島県では漁業の振興・発展が地方税収の向上に繋がる一つの手段とみなされていた。

「海川漁図説」の主な内容は、宇多・行方兩郡での漁具とその使用方法や鰯の加工法、明治十一年漁獲表、標葉・檜葉兩郡魚漁表、鯉節製造法、



漁業税収入方法などである。勸業課の分析によれば、標葉・檜葉兩郡における漁業は、久之浜・田之網・請戸の三ヶ村では漁業が盛んであったが、他の村々では専業ではなく農業の合間にやっているにすぎず、漁法や漁具は江戸時代ものを改良せず、にそのまま使用しているという。このことは、「海川漁図説」が江戸時代後期の漁業史研究の有力な史料となりうることを示している。

「略図類集」の主な内容は、菊多・磐前兩郡での多様な漁法や漁具が法量も含めて描かれており、その解説も丁寧な付されている。対象地域は、磐前郡小名浜が中心で、磐前郡では多い順に永崎村・豊間村・下大越村となっている。菊多郡では、大倉村・下川村・植田村の順に多い。理由は定かではないが、磐城郡の村は全く取り上げられていない。

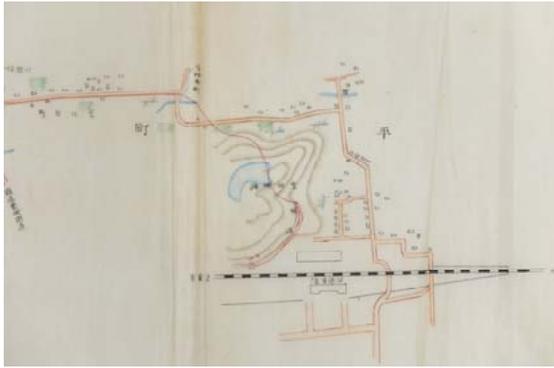
ところで、「海川漁図説」および「略図類集」は、明治十二年の『水産旧慣調』(明治・大正期の福島県庁文書三〇一七号)と比較・校合してみると、後者を基にしつつも、訂正を加えて浄書・抄出したものとみなすことができる。

上の図は、小名浜において下帯姿で素潜りした漁師が首から提げた鍬鏝を使って石決明を採取する場面で、腰には採った石決明を入れるスリカを結んでいる。(渡邊智裕)

地方鉄道敷設の記録

福島県庁文書に、『赤井馬車鉄(軌)道敷設関係書類』(明治・大正期の福島県庁文書二〇九七号)という簿冊がある。馬車鉄道とは、文字通り馬が線路上の車輛を引く鉄道であり、表題の赤井馬車鉄道は、常磐炭田の一つで、現いわき市赤井地区に鉱区を有した炭鉱から採掘された石炭の運搬を主な業務とした鉄道である。明治三十九年〜四二年(一九〇六〜一九〇九)の会社設立および軌道敷設の経緯を知ることができる一連の資料である。

会社設立にあたっては、自由民権運動家で、福島県会議員九期を務めた柏原左源太が、岩城郡赤井村長時



赤井馬車(軌)道敷設関係書類 (明治・大正期の福島県庁文書2097号)

代に岩城郡平町長殿木完鑑治・同郡好間村長木田彌造の三名と図り、明治三十九年六月一日に内務大臣原敬あてに「馬車鉄道敷設願」を提出している。発起人には惣代である柏原左源太に加え、品川白煉瓦株式会社(創業)である社長の西村勝三ほか西村辞三郎・藤村義苗・山内政良・豊島駒吉の四名の会社関係者と第一国立銀行役員八十島親徳。三星炭鉱株式会社社長、自由民権運動家でもある福島県選出衆議院員の松本孫右衛門が名を連ねている。

約二ヶ月後の明治三十九年八月二八日には、前述の出願書類に対し、「内務省福甲第七四号」にて特許状および命令書が交付されている。ただし、途中、同年七月二八日付で一般旅客も乗車できるよう鉄道敷設目的の変更を行っている。

命令書は四三条からなり、線路の区間割について、原動力は馬一頭立・軌間は二呎六吋(七六二mm)といった規格に関することや制動器や信号器などの安全面に関するものなど多岐にわたる。また、この簿冊には、書類に添付された多くの工区図や橋梁設計図、車両構造図等が含まれており、当時の図面作成の緻密さなども確認できる。

なお、明治四〇年赤井馬車鉄道は、実態に合わせ鉄道部分の名称を軌道と変更している。(佐々木慎一)

平成二七年度 行事予定 (平成二七年一〇月〜平成二八年三月)

1. 展示公開

「江戸時代についての豆知識」

収蔵資料展の合同を利用し、小規模なパネル展示を開催いたします。江戸時代に使われた街道やお金の数え方、また、江戸時代の時を知るうえで欠かせない不定時法などを解説し、江戸時代の庶民の知識を紹介します。

【会期】平成二七年一〇月一〇日(土)〜十一月一日(日)

「新公開史料展」

『福島県歴史資料館収蔵目録』第四六集に収録され、新たに公開となった資料を紹介します。

【会期】平成二八年一月一六日(土)〜三月三日(日)

2. 地域史研究講習会

地域史の研究の方法とあり方について、最新の研究成果に基づき理解を深め、歴史資料の保存・活用に関心を高めていただく講習会を開催いたします。

内容は「鎌倉幕府と東北―南奥を中心に―」と題し東北学院大学文学部教授七海雅人氏に御講演をいただきます。また、報告一として「江戸時代における磐城の古式捕鯨について」と題し、いわき市暮らしの伝承館館長の小野浩氏に御報告いただきます。

報告二として「陸奥国戸籍と古代の集落」と題し、当財団歴史資料課長の安田稔より報告いたします。

【開催日】平成二七年一〇月三十一日(土) 午前一〇時〜午後三時

【会場】県文化センター二階会議室

【受講料】三〇〇円(資料代)

【定員】一二〇名。定員になり次第

締切りますが、席に余裕がある場合

もごさいますので、当日まで受け

いたします。

3. 第三回フィルム上映会

日本の伝統文化と題し、歴史や風土、民俗芸能、伝統文化に関する記録映画を上映します。参加費は無料。

【日程】平成二七年十一月二八日(土) 午後一時〜午後三時

【会場】県文化センター視聴覚室

【上映作品】①『森のくらし 第一章 ふくしまの竹と笹』②『柳橋の獅子舞』③『会津の初市』を予定。

福島県史料情報

第43号 平成27年10月25日

編集・発行

公益財団法人 福島県文化振興財団

福島県歴史資料館

〒960-8116 福島市春日町5-54

TEL 024-534-9193 FAX 024-534-9195

URL http://www.history-archives.fks.ed.jp/

E-mail office@history-archives.fks.ed.jp